

県営畑地帯総合整備事業野辺山地区
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

-長野県南牧村内その2-

や で が わ い せ き ぐ ん
矢出川遺跡群

2005.9

長野県佐久地方事務所
長野県南牧村
長野県埋蔵文化財センター

県営畑地帯総合整備事業野辺山地区
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

-長野県南牧村内その2-

や で が わ い せ き ぐ ん
矢出川遺跡群

2005.9

長野県佐久地方事務所
長野県南牧村
長野県埋蔵文化財センター



調査区後方に初夏の八ヶ岳を望む



矢出川遺跡群全景（平成6年南牧村撮影に加筆）



1d区 III層で検出された石器ブロック



出土遺物

はじめに

森林限界から天空へ向かって屹立する主峰赤岳、そして針葉樹に覆われた八ヶ岳の山々。その裾野に広がる雄大な高原と矢出川流域の湿地林等々…。こうした景観を一望することのできる野辺山高原は、旧石器時代の情景を思い描くのに最適な場所と言えるでしょう。その中に位置する矢出川遺跡群は、日本ではじめて細石器・細石刃が発見された遺跡として著名なだけでなく、旧石器時代（先石器時代）の遺跡が集中する「先石器時代の里」と称される場所にあたります。

矢出川遺跡群に関する研究は、これまでに数多くの方々によって進められ、成果を上げてきました。その基盤を支えて来たのは、地元研究者の地道な活動や、耕作の傍らで遺物を採取・保管してきた地元の方々でした。そこに大学の研究者を中心とした活動が加わることによって、矢出川遺跡群の学術的な価値は全国へ、そして海外へも聞こえるようになりました。近年では、開発に伴う事前調査が行われるようになり、広い範囲を発掘することによって新たな知見が加えられてきています。

本書は、県営畑地帯総合整備事業野辺山地区幹線7号線の建設に伴う発掘調査の成果を示すものです。

今回の調査では、全長400mあまりにおよぶ範囲を発掘することによって、矢出川第Ⅵ遺跡・第Ⅶ遺跡や、第59地点・第65地点と呼称された遺物分布地点の広がり具合や残存状況、地形と遺跡の関係を知ることができました。また、これまでは断片的な出土資料しかなく、実態がはっきりしていなかった約2万年前に遡ろうかという石器ブロックが発見され、大きな成果を得ることができました。

一方で、調査対象地区のほとんどの場所は、深い耕作や道路敷き・水道施設の埋設などによって、旧石器時代の遺物を包含するはずの層が壊されていたり、削られてしまっていました。もし、本来これらの地点に細石器などが眠っていたことを想うと、本書は、いくつかの遺跡・地点の死亡診断書ということになるかもしれません。今後の遺跡保存のあり方に警鐘を鳴らすものと言えるでしょう。

現代人が心ひかれる野辺山高原。その風景を守り活かすこととともに、はじめて野辺山高原に足を踏み入れた先人たちの原風景を、どのように後世に伝えてゆけばよいのでしょうか。新たな発見と失われた部分を明らかにできた本書が、将来について考える一助になれば幸いです。

例 言

- 1 本書は、県営畑地帯総合整備事業野辺山地区幹線7号線拉幅に伴う南佐久郡南牧村所在の矢出川遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は県佐久地方事務所・南牧村が(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターに委託して実施したものである。
- 3 整理・報告書作成業務は、長野県埋蔵文化財センターで行った。
- 4 本書で使用した航空写真は、国土地理院所蔵の1952年米軍撮影のモノクロ写真。南牧村所蔵の平成6年度撮影のカラー写真を使用した。
また、使用した地図は、南牧村作成の1/5000、および県佐久地方事務所作成の設計平面図1/500をもとに作成した。
- 5 測量業務は新日本航業株式会社に委託した。
- 6 発掘調査および整理作業の分担などは第1章1節に掲載した。
- 7 黒曜石の産地同定分析は、沼津工業高等専門学校 望月明彦教授に、火山灰分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、石材鑑定は、山崎まゆみ調査研究員があたった。
- 8 本書の執筆・編集は寺内隆夫調査研究員があたり、市澤英利調査部長・廣瀬昭弘調査1課長が校閲した。
- 9 調査、報告書作成にあたっては、以下の方々からご教示・ご指導をいただいた。感謝の意を表したい。伊藤恒彦、大竹幸恵、大竹憲昭、川崎 保、堤 隆、豊田秀治、藤森英二、矢本節郎
- 10 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、南牧村教育委員会に引き渡される。

凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。
各調査区平面図 (1/500)、第1号石器ブロック関連図・土層柱状図 (1/40)
石器実測図 (3/4)
- 2 座標は世界測地系に変換してある。

本文目次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

本文目次

挿図目次

挿表目次

写真図版目次

第1章 調査経過の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
1 発掘調査委託契約	
2 調査体制	
第2節 調査および報告書刊行までの経過	2
1 発掘調査の経過	
2 資料整理および報告書刊行までの経過	
第2章 遺跡周辺の環境と調査のねらい	3
第1節 遺跡周辺の自然環境	3
1 矢出川遺跡群の地理的な位置	
2 地質環境と遺物包含層	
3 地形環境と遺跡立地	
4 植生を中心とした環境	
第2節 歴史的環境	5
1 矢出川遺跡群の歴史地理的な位置	
2 各時代の周辺遺跡	
第3節 調査への課題	7
1 本調査への課題	
2 各調査区でのねらい	
第3章 調査の方法と成果	9
第1節 調査の方法	9
1 調査範囲	
2 発掘調査の方法	
3 資料整理・報告書作成の方法	
第2節 層位	13
1 基本土層	
第3節 検出された遺構	15
1 検出された遺構	
2 第1号石器ブロック	
第4節 出土した遺物	15
1 1区出土遺物	
2 2区出土遺物	
3 隣接地点採取遺物	
第4章 自然科学分析	21
第1節 自然科学分析のねらい	21
第2節 火山灰分析結果	21
1 火山灰分析について	

2	分析方法	
3	結果および考察	
第3節	黒曜石の産地同定結果	23
第5章	成果と課題	24
第1節	調査成果について	24
1	主な調査成果	
2	Ⅲ層中検出の石器ブロックについて	
3	細石器・遺物包含層まで達する攪乱	
第2節	今後の課題	26
写真図版		
抄録		
奥付		

挿 図 目 次

図1	矢出川遺跡群および幹線7号線関連調査区の位置	1
図2	野辺山原地質図	3
図3	後期旧石器時代の周辺遺跡	6
図4	縄文時代以降の周辺遺跡	6
図5	1区調査範囲および柱状図	10
図6	2区調査範囲および柱状図	11
図7	第1号石器ブロック遺物分布図	14
図8	第1号石器ブロック付近土層断面図	14
図9	第1号石器ブロック接合関係図および石材別分布図	14
図10	第65地点採取遺物	17
図11	第1号石器ブロック出土遺物(1)	18
図12	第1号石器ブロック出土遺物(2)	19
図13	重鉱物・火山ガラス顕微鏡写真	22
図14	1d区27グリッド南壁深掘地点の重鉱物組成および火山ガラス比	22
図15	火山ガラスの屈折率	23

挿 表 目 次

表1	出土遺物一覧	20
表2	重鉱物・火山ガラス比分析結果	22
表3	判別図法・判別分析からの最終推定結果	23
表4	判別図法による推定結果と判別分析による推定結果	23
表5	遺物出土地点と既存の遺跡	24

写真図版目次

巻頭図版1

巻頭図版2

PL1	矢出川遺跡群周辺航空写真(1952年米軍撮影)・1a~b区関係
PL2	1d区および第1号石器ブロック関係
PL3	第1号石器ブロックおよび2区調査関係
PL4	第1号石器ブロック出土遺物
PL5	第1号石器ブロックおよびその他の遺物

第1章 調査経過の概要

第1節 調査に至る経過

1 発掘調査委託契約

長野県佐久地方事務所（以下、県佐久地方事務所）は、県管畑地帯総合整備事業（野辺山地区）により、昭和61（1986）年から農道の整備を進めてきた。今回、整備・拡幅が予定された範囲は、二ツ山地帯にある現道を延長1.1kmに渡って幅7mに拡幅する事業である（幹線7号線拡幅工事）（図1）。

そのため、県佐久地方事務所、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下、県教委）、南牧村教育委員会の三者によって埋蔵文化財保護協議が行われ、遺構や遺物包含層の有無を確認するための試掘調査が県教委によって実施された。平成16年12月の試掘では、遺構・遺物の発見はなかったものの、旧石器時代の遺物が含まれている可能性の認められる地層が残存していたため、本調査の必要性が指摘された。

平成17年1月 県教委の試掘調査結果を受けて、県佐久地方事務所、県教委、長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）の3者が協議し、県埋文センターに調査が委託されることとなった。

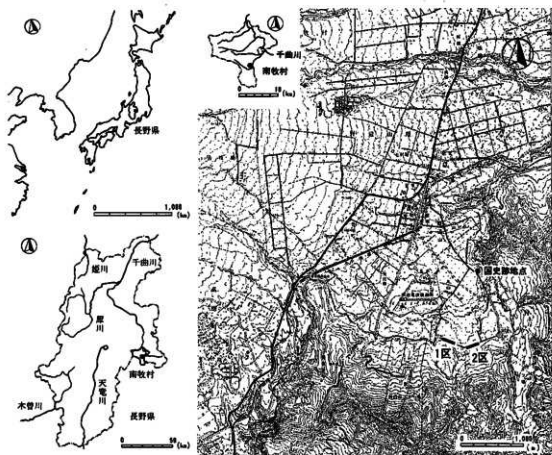


図1 矢出川遺跡群および幹線7号線関連調査区的位置
 --- 前回報告(幹線5号線)
 ——— 今回報告(幹線7号線)

発掘調査委託契約は平成17年4月7日付けで行われ、報告書刊行までの期間は同年9月30日とされた。

2 調査体制

調査組織 矢出川遺跡群の発掘・整理、報告書作成業務を遂行するため、以下の体制を整えた。

理事長 所長 副所長 **調査部長** 管理部長補佐 **調査1課長** **調査研究員**

田中康夫 仁科松男 根岸誠司 市澤英利 上原 真 廣瀬昭弘 寺内隆夫、中野亮一

発掘調査参加者 井出けさ子、今村みずず、上原美幸、寺島和子、三石房子、中島芳榮、福島保子

整理作業参加者 (水 洗) 井原真弓、倉沢より子、半田純子、柳原澄子

(石器実測・トレース) 市川ちず子、大林久美子、鳥羽仁美、

(遺構図等トレース) 井原真弓、浅井とし子

第2節 調査および報告書刊行までの経過

1 発掘調査の経過

現地調査の概要と経過は、以下の通りである。

平成17年4月7日 委託契約が結ばれる

平成17年4月11日 調査研究員立ち会いで、重機による

表土の除去開始

平成17年4月13日 発掘開始式

平成17年4月22日 2区Ⅲ層中で、チャートの角礫集中箇所を検出したが自然産であった。

平成17年5月16日 1d区で、Ⅲ層中から石核が出土。

周辺から石核・剥片などが集中して出土し始める。

平成17年6月2日 1d区で、石器ブロックを完掘し、発掘終了式をおこなう。



発掘調査参加者

2 資料整理および報告書刊行の経過

室内整理作業および報告書刊行に至る経過は、以下の通りである。

平成17年6月3日 基礎整理作業開始

平成17年6月6日 報告書へ向けた本格整理作業開始。

平成17年6月14日 浅間縄文ミュージアム埋蔵学委員に出土石器へのご教示を得、実測に入る。

平成17年6月21日 火山灰分析をパリオサーヴェイ株式会社へ委託する(7月29日成果提出)

平成17年7月5日 黒曜石の産地同定分析を静岡県・沼津高専の望月明彦教授の研究室で実施

平成17年8月18日 報告書原稿入稿

平成17年9月9日 報告書刊行



調査風景



石器実測風景

第2章 遺跡周辺の環境と調査のねらい

第1節 遺跡周辺の自然環境

1 矢出川遺跡群の地理的な位置

日本列島のほぼ中央 矢出川遺跡群は長野県の東部、南牧村の野辺山原南部に存在する(図1)。地図上の位置については、巻末の抄録を参照していただきたい。野辺山原は、日本列島のほぼ中央にあることから、南北の文化の結節点となっている。また、日本海へ流入する千曲川(・信濃川)の最上流域にあたる。こうした位置関係は、自然資源のあり方のみならず文化・歴史的な環境(後述)に強く影響を与えている。

野辺山原の西側には八ヶ岳連峰とその山麓が展開し、南側は山梨県境の山々が連なる。矢出川をはじめとする河川がそれより流下しており、河川流域には湿原が広がっている。今回の調査区は、豊富な動植物資源を支える矢出川湿原から南へ数百mほど離れた地区である。

2 地質環境と遺物包含層

野辺山原層 矢出川遺跡群が立地する野辺山原は、八ヶ岳山麓に発達した火山性扇状地(野辺山原面)である(図2)。野辺山原面を構成する野辺山原層は、上・中・下部に三分される。下部層はスコリア層、火山角礫岩層、泥流堆積物からなり、その基底部出土の黒曜石岩片のフィッシュトラック年代により、約27~28万年前という生成年代が示されている。中部層は、泥炭~泥炭質泥・砂・礫層からなり、湖成堆積物が中心となる。また、上部層は、火山岩起源の礫層・砂層、スコリア層、火山角礫岩層からなる。

ソフトローム層 細石器が出土した層位は、野辺山原層最上部のいわゆるソフトローム層および腐植化が進む漸移層や黒色土層である。ローム層の成因は純粋なテフラから構成されるのではなく、周辺の表層地質から供給された碎屑物や風塵などの二次堆積物によって形成されたと考えられている(町田ほか1981)

遺物包含層の地質年代 降下火山灰では、AT(約26000~29000年前)の堆積が、8010~15地点で遺物包含層対応層より下層で検出さ



1: 沖積層 2: 小川口群 3: 馬場平層 4: 秋山原群 5: 野辺山原面(2-5: 最近堆積物) 6: 野辺山原層上部 7: 野辺山原層中部 8: 野辺山原層下部および河成堆積・スコリア 9: 高石川層 10: 雫の口大砂岩 11: 源盛山火山岩類 12: 石炭期礫岩類 13: 高堂山層群 14: 川上層群 15: 金沢坂層群 16: 天狗山層群 17: 地比9堆積物 18: (特定)新層 なお、右図内記号は対応する図録名。1: 礫科土、2: 十冠砂、3: 八ヶ岳、4: 金峯山

図2 野辺山原地質図(1986 友野、2004 川崎 改変)

れている(町田ほか1981)。近隣の中つ原第5遺跡B地点では、遺物包含層より下部20cmほどにAT起源の火山ガラスの集中が認められる。一方、浅間山起源とされる「浅間一板鼻黄色軽石」(As-YP、約1.3-1.4万年前)に含まれるUGタイプの火山ガラスが遺物包含層(ソフトローム層)で増加するとされる(河西1991)。また、中つ原1遺跡G地点では漸移層中で「浅間一板鼻黄色軽石」が検出されている(早田1995)。

3 地形環境と遺跡立地

火山性扇状地の野辺山原 野辺山原の地形は標高1340m~1350m付近で傾斜が緩やかになり、遺跡立地の好条件となっている(町田ほか1982)。今回の調査区はその南端に近い部分にあたり、飯盛山とその尾根に認められる新第三紀火山岩類によって火山性扇状地の拡大が阻止された場所で、南側に山地がせまっている。調査区の地表は標高1345m前後であり、八ヶ岳の扇状地と山地の境とされる1350mラインに近いため、各調査区の基盤が八ヶ岳の扇状地上か、南側山地の尾根筋にあるのかが課題の一つになった。

山塊斜面型の立地 こうした立地条件は、遺跡が集中する矢出川遺跡群の中でも「山塊斜面型の立地」(前山ほか1981)に分類され、多くの遺跡、地点、散布地が点在する。

矢出川湿地と遺跡群 一方、扇状地を開析する矢出川とその周辺に広がる湿地が遺跡にとって重要である。入植当時における湿地と乾燥地の復元調査からは、現地形とローム層上面の旧地形との間に大きな差異がないとされ、旧石器時代の遺跡が矢出川流域の乾燥地に立地しているという(前山ほか1981, 1982)。特に、細石器の時期には野辺山原南部の矢出川遺跡群に遺跡が集中する。また、安田喜恵氏(安田1982)は、谷底低地に埋没していた泥炭の¹⁴C年代測定値(29400+700-830)から、細石器段階の地形の基本的な骨格(大地形)は3万年以前にできあがっており、現在と基本的には変わらないとしている。

4 植生を中心とした環境

野辺山高原 標高1300~1400mの低山帯に位置し、年平均気温7.7°、年降水量1417.2mmの冷涼な気候である(菊池1986)。現在の植生は、表日本型のブナクラス上部の夏緑広葉樹林域に含まれるが、多霧や湿原が多い影響で、裏日本要素の植物も進入している。細石器の時期は、現在より3~5°低温であったとすると、オオシラビソ-シラビソ群集(亜高山針葉樹林)とスマガヤを主体とした中間湿原がモザイク状に発達した地域と想定されている(山崎1981)。

矢出川の谷底低地泥炭層の分析 泥炭層の花粉分析による古環境復元(安田1981, 1982)をみると、細石器の時代に対比されている花粉帯Ⅲでは、一時的に亜寒帯針葉樹が拡大する時代もあるが、その後、高い出現率を示すものはハシバミ属とされている。ハシバミの実はその当時の人々にとって重要な食料源であったと見られる。また、森林は疎林であり、草原が広い面積を占めていたとされている。矢出川湿原へ集まってくる動物群を狩るには最良のロケーションであったと考えられる。

これを通る花粉帯Ⅱは「高山草原と粗林の時代」としている。森林限界近くのツンドラ気候に近い亜寒帯気候とされており、最終水期中の最寒冷期にあたるという。

ナイフ形石器が出土する時代に相当しよう。

シカ 動物遺体については出土資料に恵まれないため、旧石器時代の動物相を復元することは難しい。稲田孝司氏の研究を基にした堤隆氏の想定では、野辺山原における細石器の時期の狩猟対象獣は、大型哺乳類ではなくシカなどの中型である可能性が高いという(堤2004)。とすれば、北相木村・栃原岩陰遺跡の縄文時代早期を中心とした動物遺体の組成(Ⅰ



第1号石器ブロック脇に自生するハシバミの新緑

Risho2003) や、現在の動物相(藤森1966、宮下・鈴木1982)とさほど変化はないようである。

第2節 歴史的環境

1 矢出川遺跡群の歴史地理的な位置

北と南の接点 日本列島のほぼ中央に位置する矢出川遺跡群では、細石器の時期に関してみると、西南日本との関係が強い稜柱形細石刃石核と、北方系とされる楔形細石刃石核の両者が出土している(堤1993)。
八ヶ岳南麓との結びつき 矢出川は八ヶ岳山麓に源流を持ち千曲川と合流して日本海側に向かう。しかし、千曲川上流域は長距離に渡って狭小な地形が続いている。これに対し、分水嶺を越えるものの、高原づたいの交通に利便性が優れている山梨県(八ヶ岳南麓)側との結びつきが認められる。例えば、川上村の三沢遺跡(川上村教委1987)や大深山遺跡(八幡1976)など、縄文時代中期の遺跡では、八ヶ岳南麓との類似性が高い土器が多く出土しており、佐久平の土器を凌駕している。

交易・移動ルート また、日本海側へ流下する千曲川と太平洋側へ流下する釜無川の分水嶺に近い点から、南北交易ルートの中継地点であったと見られる。矢出川南遺跡で出土した弥生時代前期の条痕文土器(由井1970)は、東海地域との関連性を裏付ける一例である。

矢出川の地名 さらに、中世には交易ルートであるとともに武田方の軍勢が佐久地域へ進出するルートでもあった。矢出川の地名は、鉄鉱が多量に採取されたことから付けられたものであり、古戦場説(土屋1983)や祭祀説(桐原1981)がある。いずれにせよ、2つの勢力が接触する地域、あるいは境をなす地区であったことがうかがえる。

2 各時代の周辺遺跡(図3・4)

矢出川遺跡群の調査歴 矢出川遺跡の研究履歴については、すでに多数の関係者により発表されている(芹沢1982、由井1992、堤1993・2004、佐久考古学会2003)。また、当センターの報告書(川崎2004)でも概略をまとめてあるので、参照していただきたい。日本における後期旧石器時代の細石器研究がここではじまって以来、研究の蓄積、深化がつついてきた。ここでは、それら先学の調査・研究の中から、今回の調査地区の課題を搜してゆく。

旧石器時代～縄文時代草創期 現在、野辺山原で確認されている最も古い人類の痕跡は、AT降下後、約2万数千年以降である。ナイフ形石器を出土した遺跡は、野辺山編年(堤1993)でI期とされる野辺山B5地点(佐藤1970)、矢出川第I遺跡(明治大学考古学研究室1982)をはじめ、合計32箇所にはのぼる(堤ほか2004)。やや時代の下る野辺山IV期にあたる細石刃・細石核を出土した遺跡は16箇所である。この時期になると、矢出川流域に遺跡が集中する傾向を見せる。細石刃5000点、細石刃石核644点を採取、あるいは出土した矢出川第I遺跡(国史跡地点)のように、中核的な遺跡が成立している。また、尖頭器を採取した遺跡は11箇所である。今回調査区隣接地の三沢西遺跡(村遺跡番号65)では、縄文時代草創期の石器が採取されている(南牧村遺跡詳細分布調査団1993)

縄文時代 分布調査によると、前期の諸磯式土器の時期から遺跡が増加し、最も多くなっている。前期で16箇所、統



山梨の花咲く矢出川第I遺跡(国史跡)からの遺景



図3 後期旧石器時代の周辺遺跡 (堤・鳥居 2004)

- 1 矢出川第I遺跡
- 2 矢出川第II遺跡
- 3 矢出川第III遺跡
- 4 矢出川第IV遺跡
- 5 矢出川第V遺跡
- 6 矢出川第VI遺跡
- 7 矢出川第VII遺跡
- 8 矢出川第VIII遺跡
- 9 矢出川第IX遺跡
- 10 矢出川第X遺跡
- 11 矢出川第XI遺跡
- 12 矢出川第2地点
- 13 矢出川第15地点
- 14 矢出川第18地点
- 15 矢出川第19地点
- 16 矢出川第21地点
- 17 矢出川第22地点
- 18 矢出川第23地点
- 19 矢出川第29地点
- 20 矢出川第38地点
- 21 矢出川第39地点
- 22 矢出川第47地点
- 23 矢出川第49地点
- 24 矢出川第52地点
- 25 矢出川第53地点
- 26 矢出川第55地点
- 27 矢出川第59地点
- 28 矢出川第64地点
- 29 矢出川第65地点
- 30 矢出川第67地点
- 74 中ツ原第1遺跡A地点
- 75 中ツ原第1遺跡O地点
- 76 中ツ原第1遺跡B地点
- 77 中ツ原第1遺跡C地点
- 78 中ツ原第1遺跡E地点
- 79 中ツ原第1遺跡F地点
- 80 中ツ原第1遺跡G地点
- 81 中ツ原第5遺跡B地点
- 82 中ツ原第6遺跡
- 83 中ツ原第4遺跡A地点
- 84 中ツ原第3遺跡B地点
- 85 中ツ原第3遺跡B地点
- 86 ハケ第1地点
- 87 ハケ第2地点
- 88 ハケ第3地点
- 89 ハケ第4地点



図4 縄文時代以降の周辺遺跡 (南牧村教委 1993)

- 53 野辺山駅北遺跡
- 56 喜峯ヶ丘南遺跡
- 57 ニツ山北遺跡
- 58 ニツ山遺跡
- 59 ニツ山西遺跡
- 60 ニツ山南遺跡
- 61 野辺山駅南遺跡
- 62 矢出川北遺跡
- 63 矢出川南遺跡
- 64 片桐牧場上遺跡
- 65 三沢西遺跡
- 66 平沢パイロット遺跡
- 67 青木遺跡
- 68 三軒家遺跡
- 69 矢出原南遺跡
- 70 矢出原遺跡
- 71 矢出原北遺跡
- 72 鹿ノ原遺跡
- 73 野辺山駅前遺跡

いて中期で14箇所が確認されている。今回の調査区の隣接地では、片桐牧場上遺跡（村遺跡番号64）で諸磯式土器が採取されている。その後は、後期4箇所、晩期2箇所と激減する。この他、細別時期不明の遺跡が多数存在している。

弥生時代 今回の調査区の隣接地では、前期の資料が矢出川南遺跡（村遺跡番号63）から出土しており、弥生後期や古墳前期の遺物も採取されている。矢出川河畔に成立した遺跡である。このほか、野辺山原では後期の遺跡が2箇所認められている。

古代 野辺山原で11箇所の遺跡が確認されているが、詳細は不明である。

中世 矢出原という地名が示すように、この地域一帯では鉄鍬が数多く採取されている。調査区近隣では、前述の三沢西遺跡の他、1・2区境にある沢の南側斜面や、矢出川南遺跡とその南側斜面で採取されている（土屋1983）。これら多出する鉄鍬の性格について、桐原健氏は、非実戦的な形式の大形鉄鍬が多いこと、国境から出土していることなどから、古戦場というよりも祭祀的な性格を見ている（桐原1981）。

第3節 調査への課題

1 本調査への課題

矢出川遺跡周辺の自然環境や研究史から、今回の調査への課題として以下の項目を想定した。

①**遺構・遺物検出面や包含層が残存しているか** 野辺山原の開拓にあたり、樹木の抜根や大型機械による土壌改良などがなされているため、まずは、遺物包含層の残存状況を確認することをあげたい。

②**地形の変換点の調査** 矢出川河畔からやや離れた地区であるため、遺跡の有無と立地条件との関係、時期の問題に注目したい。特に、台地と南側山地との境界近くであることの意味をとらえたい。また、東西に長い調査区である利点を活かして、微地形の変化と遺跡の立地の関係をとらえたい。

③**旧石器～縄文草創期** 矢出川遺跡群の中心的な時代である後期旧石器時代の細石器の時期について、この地区が、中核的な第Ⅰ遺跡などどのような関係にあるかを明らかにしたい。また、隣接地で採取されているナイフ形石器の時期や縄文時代草創期の資料の検出に努めたい。

④**その他の時代の遺構と遺物** 隣接地で採取されている弥生時代や中世の遺物・遺構にも注意を払う。

2 各調査区でのねらい

次に、今回の調査対象地区を細別して課題をあげてゆく。

1区 矢出川第Ⅵ遺跡と第Ⅶ遺跡に挟まれたa・b区と、矢出川第59地点にあたるc・d区に分かれる。

前者（a・b区）は、南側山地から張り出した尾根の先端から緩傾斜地に移行する地点にあたる。第Ⅵ・第Ⅶ遺跡ではナイフ形石器が採取されている（明治大学考古学研究室1982ほか）。また、矢出川第Ⅵ遺跡（旧石器時代の名称）は、縄文時代以降の三沢西遺跡と重複する。三沢西遺跡名では、縄文草創期の記載があり（南牧村遺跡詳細分布調査団1993）、中世の鉄鍬も採取されている（土屋1983）。

後者（c・d区）は、東側の沢に向かう緩傾斜地にあたり、第59地点からナイフ形石器および細石刃が採取されている（明治大学1982ほか）。また、東側の沢筋を南へ入った地点では中世の鉄鍬（土屋1983）や、古銭などが採取され



矢出川湿地林越しに見る調査区遺景

ている(土屋1998)。

以上、この地区では漸移層・ローム層上面での縄文時代以降の遺構確認と、漸移層前後での細石器の確認と、さらに、ローム層中でのナイフ形石器の確認をおこなう。

2区 矢出川第65地点に近接したa・b区と、矢出川第63散布地に近いc・d区に分かれる。

前者(a・b区)は、西側に存在する沢へ向かう緩傾斜地であり、沢を挟んで第59地点と対峙する。第65地点からは細石刃が採取されている(明治大学考古学研究室1982ほか)。ほぼ同一地点では中村龍雄氏が、土屋忠芳氏の採取した水晶や頁岩製スクレイパーなどを三沢開拓地遺跡として紹介している(中村1983)。

後者(c・d区)は、緩やかな尾根上からやや東へ傾斜しはじめる地区である。明治大学の分布調査では、第63散布地で剥片が採取されている。

2区からやや東側に離れた地点では、中世の鉄鏝や古銭(土屋1983・1998)が、北東側の矢出川南遺跡からは弥生前期(由井1970)、後期、土師器など(南牧村遺跡詳細分布調査団1993)が採取されている。この地区でも漸移層・ローム層上面での遺構の確認。そして、漸移層・ローム層中の調査が必要である。

引用・参考文献

- Ikutaro Risho 他 2003 『Stratigraphic Distribution of Early Holocene Mammals from the Tochibara Rock Shelter Site, Kita-aiki, Nagano Prefecture, Central Japan』 [Journal of Geosciences, Osaka City University] Vol. 46, Art6
- 河西克彦 2005 『弥生時代前期末～中期初頭の土器について』 『地方道路文化会報(主)川上佐久義埋蔵文化財発掘調査報告書一日田町内一唐古B遺跡』 長野県埋蔵文化財センターほか
- 川崎 保 2004 『歴史的環境』 『県営畑地帯総合整備事業野辺山地区埋蔵文化財発掘調査報告書一南牧村内一 矢出川遺跡群』 長野県埋蔵文化財センターほか
- 桐原 健 1981 『古戦場発見の鉄鏝に見られる一性格』 『千曲』 第31号 東信史学会
- 菊池清人 1986 『村の自然と地理』 『南牧村誌』 南牧村誌刊行会
- 佐久考古学会 2003 『特集』 『野辺山地域における旧石器研究50年』 『佐久考古通信』 No86
- 佐藤達夫 1970 『長野県南佐久野辺山B5地点の石器—ナイフ形石器の編年に関する覚書—』 『信濃』 第22巻4号
- 島田恵子ほか 1991 『丸山遺跡』 南牧村教育委員会
- 島田恵子 1998 『南佐久郡の考古学研究』 『縄文時代』 ～『考古学から見た中世』 『南佐久郡誌』 考古編 郡誌刊行会
- 芹沢長介 1982 『日本旧石器時代』 岩波新書
- 芹沢長介 1982 『矢出川遺跡』 『長野県史』 考古資料編 主要遺跡(東信)
- 芹沢長介・由井茂也 1998 『矢出川遺跡の発見と調査』 『南佐久郡誌』 考古編 南佐久郡誌刊行会
- 早田 勉 1995 『中ッ原第1遺跡G地点のテフラ分析』 『中ッ原第1遺跡G地点の研究』 I ハッ岳旧石器研究グループ
- 土屋忠芳 1983 『歴史時代 野辺山原出土の鉄鏝』 『矢出川 水晶考古学』
- 土屋忠芳 1986 『先土器時代(旧石器時代)・縄文時代(新石器時代)・弥生時代』 『南牧村誌』 南牧村誌刊行会
- 堤 隆 1991 『野辺山原における細石刃文化の様相』 『中ッ原第5遺跡B地点の研究』 ハッ岳旧石器研究グループ
- 堤 隆 1993 『漁き狩人たちのハッ岳』 ほうずき書籍
- 堤 隆 2004 『氷河期を生き抜いた狩人 矢出川遺跡』 新泉社
- 戸沢光則 1964 『矢出川遺跡』 『考古学集刊』 第2巻第3号 東京考古学会
- 友野邦彦 1986 『村の地質』 『南牧村誌』 南牧村誌刊行会
- 中村龍雄ほか 1983 『矢出川 水晶考古学』
- 藤森栄一 1966 『古道』 学生社
- 南牧村詳細分布調査団 1993 『南牧村遺跡詳細分布調査報告書—縄文時代～中世—』 南牧村教育委員会
- 明治大学考古学研究室編 1980 『報告・野辺山シンポジウム1979』
- 明治大学考古学研究室編 1981 『報告・野辺山シンポジウム1980』
- 明治大学考古学研究室編 1982 『報告・野辺山シンポジウム1981』
- 八幡一郎 1976 『信濃大深山遺跡』 川上村教育委員会
- 由井茂也 1970 『野辺山高原の弥生式遺物について』 『長野県考古学会誌』 第9号 長野県考古学会
- 由井茂也ほか 1992 『草原の狩人—由井茂也日記抄—』 ほうずき書籍
- 吉沢 靖 1998 『旧石器時代(第二節四をのぞく)』 『南佐久郡誌』 考古編 南佐久郡誌刊行会

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 調査範囲

平面範囲 幹線7号線の拡幅工事地区のうち、試掘調査によって漸移層やソフトローム層の残存が確認された範囲(約400m)が調査対象である。この他、1d区で遺物集中地点が見つかったため、調査対象外であった東側部分約25mを調査地区に含めた(図5)。調査区全域に埋設済みの水道管があり、保護のため道路幅のほぼ中央付近が調査対象から外された(図5・6)。

垂直範囲 既出資料によれば、細石器関係遺物の出土する層位がローム漸移層を中心として、その上下数10cm(戸沢1964)(戸沢・由井1998)前後。ナイフ形石器関係遺物がソフトローム層や下部(明治大学考古学研究室1982)とされる。そのため、ソフトローム層下で検出される礫層(・豆板層)までを対象とした。礫層は厚く、後期旧石器以前の年代に遡る可能性が高いと想定したからである。ただし、数カ所で深掘りトレンチを設定し、確認を行った。その結果、地表面からの深度については、既出資料とは地点・地形が異なっていることや、現道路下であるため攪乱を被っており、一定ではなかった(次節参照)。

2 発掘調査の方法

原則的には県埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して準備を整えた。これに、既存の周辺遺跡の状況(第2章参照)から、旧石器時代の遺物検出と出土状況の把握に重点を絞る調査方法をとった。また、現地の状況や遺構・遺物出土状況に対応して、適宜修正を加えた。

(1) 遺跡名・地区名・遺構名ほか

遺跡の名称と遺跡記号 遺跡名は県教委作成の遺跡台帳に基づいている。また、注記などの便宜上、アルファベットの大きい文字3字による遺跡記号を設定している。1文字目は、長野県内を北から9地区に分割した仮地区名(佐久地域はD)、2・3文字目は遺跡名の略号を示している。

遺跡名=矢出川遺跡群、ふりがな=やでが
わいせきぐん、遺跡記号=DYA

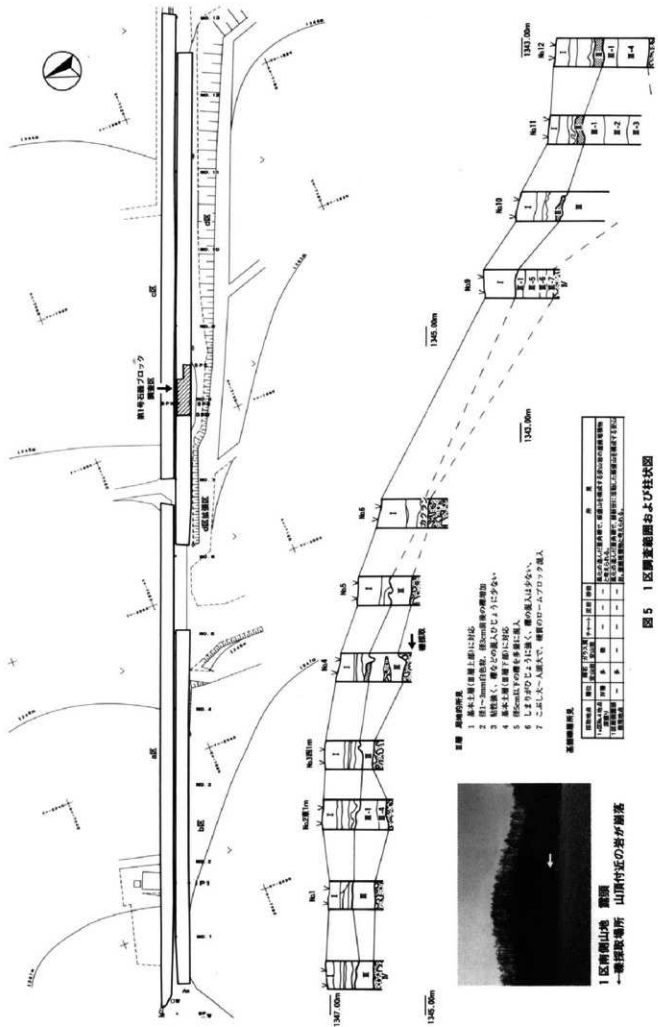
地区名 調査区が長く延びていることと、中央部に調査対象外の谷部が存在していたことから、便宜的に谷部の西側を1区、東側を2区とした。また、生活道路の確保および前述の水道管の存在によって地区が分割されたため、それぞれの調査地区をa～d区に4分割した(図5・6)。

(2) 測量の方法

狭長な調査区と石器ブロック1箇所の検出にとどまったことから、8m方眼を基準とする方



測量作業風景(道路工事がせまる)



- 1 基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜
 2 傾斜角、崖の傾斜、崖の傾斜角の傾斜角
 3 傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角
 4 基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜
 5 傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角
 6 傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角
 7 基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜

項目	内容	備考
1	基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜	基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜
2	傾斜角、崖の傾斜、崖の傾斜角の傾斜角	傾斜角、崖の傾斜、崖の傾斜角の傾斜角
3	傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角	傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角
4	基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜	基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜
5	傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角	傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角
6	傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角	傾斜角、崖の傾斜角の傾斜角の傾斜角
7	基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜	基本土層(崖上部)に対し、崖の傾斜



1 区南側山地 崖頂
 一帯採取場所 山頂付近の身が崩落

図 5 1 区調査範囲および柱状図

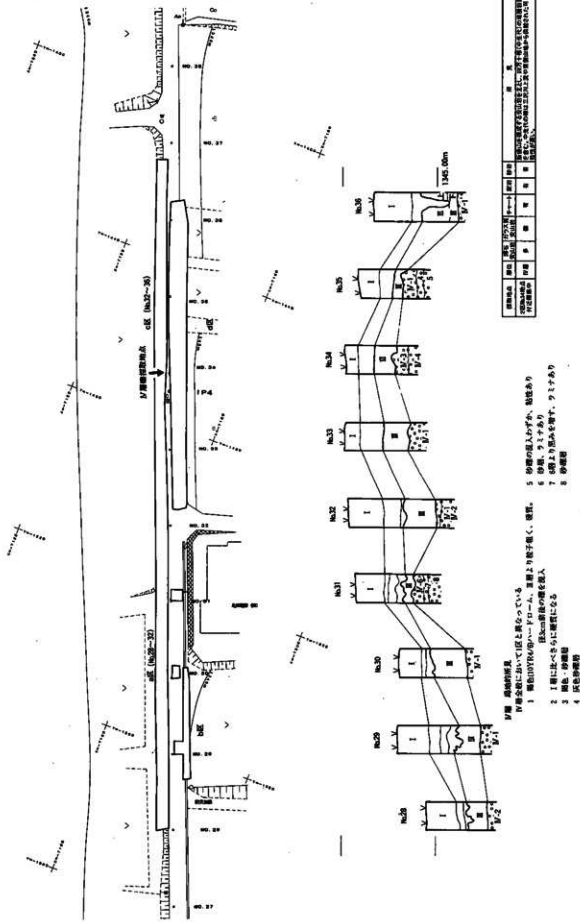


図6 2区調査断面および柱状図

法はとらず、幹線7号線の設計平面図をベースとして、調査範囲や出土遺物の位置を加えてゆく方法を使った。測地は世界測地系に修正した。個々の位置はトータルステーションと電子野帳を使用した単点測量によった。測量・作図は委託し、調査担当者が校正した。

(3) 遺構・遺物の調査方法

①遺構・遺物検出方法

耕作土除去後の精査 重機によって耕作土(黒色土)の除去を行った。耕作による攪乱はローム層(Ⅲ層)に達している場合がほとんどであった。しかし、攪乱層のすべてを重機で除去すると遺物採取もできなくなると判断し、攪乱部分が残る漸移層～ローム層上部から精査をおこなった。

ローム層の掘り下げ この段階で遺構・遺物が検出できなかった場合、ローム層上部をジョレン・両刃鎌などで掘り下げ、遺物の検出に努めた。この段階でも遺物が検出されなかった場合は、5～20m間隔に1.5×1.5m程度の試掘坑を設定し、人力あるいは重機による深掘りを行った。試掘坑の間隔、広さ、人力か重機かの違いは、分布調査時の遺物採取状況、ローム層の残存状況や堆積状況を考慮した。いずれも基盤と考えられる裸層(Ⅳ層)を確認し、断面図等を作成して調査を終了した。

②遺構・遺物の調査方法

遺構の確認 漸移層・ローム層検出の落ち込みは半截、あるいはトレンチによる試掘を試みたが、全て風倒木痕であった(写真図版3-16)。

ブロック・礫群などか否かの確認 ローム層の遺物検出作業中に礫が確認された場合は、そのつど周辺の精査に入った。角礫状に「割れ」が認められる例や剥片は、出土した時点で写真撮影した。その後、石器や礫を柱状に残して周囲を掘り下げ、広がりがあった段階で写真撮影や図化を行った。ただし、人為的なものは1d区の一箇所だけであった。チャートなどの角礫が集中していた地点は、自然堆積と判断されたため、一部を除いて詳細図作成や写真撮影は行わなかった。

また、石器ブロックについては、微細遺物採取のため、1mメッシュの仮グリッドを設定し、各区画毎にⅢ層をすべて土嚢袋に採取し、篩によって碎片の検出に努めた。

③サンプルの採取 上記の自然礫などは、その供給源がハヶ岳泥流か、南側山地かを確認するため、調査区



1c区表土削ぎと検出作業



2d区Ⅲ層中の掘り下げ



2b区Ⅲ層下部検出礫の精査(自然礫であった)



1d区微細遺物の採取を目ざして篩作業

内と南側山地の露頭から礫を採取した(図5写真参照)。また、1d区の石器ブロック中央付近の深掘り断面などから、火山灰の供給源や堆積層の成因を特定するためサンプルを採取した(第4章参照)。

3 資料整理・報告書作成の方法

遺物集中地点出土の石器類は、一部を除いて超音波洗浄機を使って水洗し、取り上げ番号のみを注記した。また、サンプリングされた礫は発掘中に現場で水洗を実施した。CADデータの図類は、一端マイラーに打ち出し(アナログ化)、遺物属性や手書き図と合成して報告書に掲載した。石器の実測・トレースは遺物実測班3名が担当し、調査担当者が校正を行った。遺物写真撮影は、デジタルカメラを用い担当者が行った。報告書の編集作業は、今回はアナログで行った。

第2節 層位

1 基本土層

(1) 基本土層

矢出川遺跡群の第1・2次調査の所見(芹沢・由井1998)、第3次調査(戸沢1964)のⅠ～Ⅳ層を踏襲する。この基本層序は、矢出川第Ⅰ遺跡のみでなく遺跡群全体を対象とした基本層序として採用されているからである(明治大学考古学研究室1981)。ただし、Ⅳ層については局地的に成因が異なる可能性が高い。ここでは、ソフトローム(Ⅲ)層直下であり、礫を多量に混入する硬質な層をⅣ層として一括した。

基本土層名は以下のとおりである(詳細は図8)。

- Ⅰ層 耕作土層・客土および根痕
- Ⅱ層 暗褐色(10YR2/3)漸移層
- Ⅲ層 黄褐色(10YR5/6)～褐色(4/6)ソフトローム層
- Ⅳ層 砂礫層
- Ⅴ層 褐色(7.5YR4/6)ハードローム
- Ⅵ層 褐色(7.5YR4/3)ハードローム
- Ⅶ層 褐色(7.5YR4/6)ハードローム

(2) 各調査区の状況

1区西端から2区東端までは道なりに約720mを計り、中間に沢が入っている。このため、堆積層の残存状況やⅣ層の成因などに差異がある。また、Ⅳ層上面の微地形は現地表面に比べ起伏が激しい。

1区 堆積量が比較的多かった東側斜面部のc区でⅡ(漸移)層の残存が認められた。一方、a・b区の尾根筋頂部付近ではⅣ(砂礫)層にまで耕作や攪乱がおよんでいた。Ⅲ層の残存も尾根上では薄く、東側斜面部で厚くなる。尾根上では、Ⅲ層中にも礫層が貫入(図5-No.4地点)しており、山崩れなどの原因による礫の押し出しがあったと想定される。

尾根頂部を形成するⅣ層は、飯盛山の崖堆積物が主体をなしている(図5中の表)。Ⅲ層下部からはしだいに礫が多くなる。これは寒冷期の影響でⅣ層の礫が上下したためと考えられる。ただし、1d区などの一部ではⅣ層礫との境が明確に分かれ、層理面に鉄分の集積(いわゆる豆板層)が認められた(図8)。

1d区の石器ブロック地点の深掘りでは、Ⅳ層とした礫層の下で再びハードローム層が確認された。そのため、尾根上で認められた基盤を形成すると思われる礫層と、斜面部の層厚が薄い礫層では、性格が異なる可能性がある。こうしたハードローム層が確認されたのは、谷へ落ち込む1d区のみである。

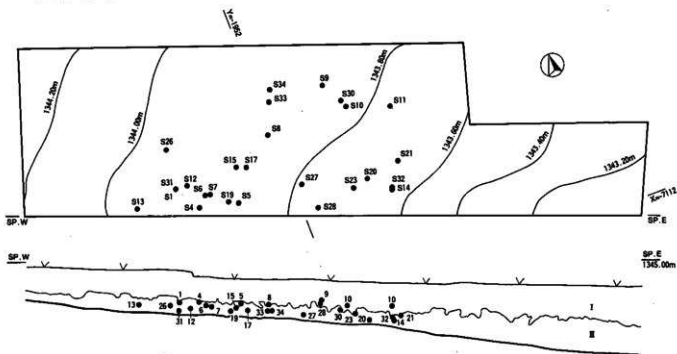
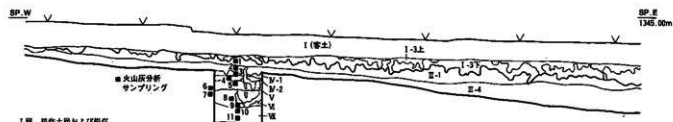


図7 第1号石器ブロック遺物分布図



I層 耕作土層および植皮

- I-1 黒色(10YR1.7/1)腐植作土 粘性・しまり強
- I-2 黒色(10YR2/1)腐植作土 しまりやや出くる。マルチ(農用ビニール)を含む
- I-3上 黒色土とロームが混在した層(北側の旧畑周辺)
- 下 腐植土を主体とし、ローム・黒色土が見られる。凹凸が激しい(原野の旧山林)
- 客土・盛り土 上記の分類以外に各地区で見られる。
- II層 暗褐色(10YR2/3)凝結層 黒色土から黄褐色ロームへ漸移的に移行する層分
- III層 黄褐色(10YR5/6)～褐色(4/6)ソフトローム 粘性あり。しまりやや強い。
- II-1層 砂礫をわずかに混入する。
- II-4層 砂礫を多く混入する。

- IV層 砂礫層 局所的に粗入礫に富み、色調はそれによって異なる。また、小礫が豊富な地点では鉄分が豊富して硬化している(いわゆる豆殻層)。砂礫の供給源は主に奥山山麓である。
- V層 褐色(7.5YR4/6)ハードローム 14区の傾斜地のみで確認。粘性強く、しまりやや強い。上部に鉄分の分布あり。
- VI層 褐色(7.5YR4/3)ハードローム 14区の傾斜地のみで確認。粘性・しまり強。前後の層に比べ褐色化している。
- VII層 褐色(7.5YR4/6)ハードローム 14区の傾斜地のみで確認。粘性・しまり強。地下水の浸透によって色調が変化しており、下部は灰褐色に変化。

図8 第1号石器ブロック付近土層断面図

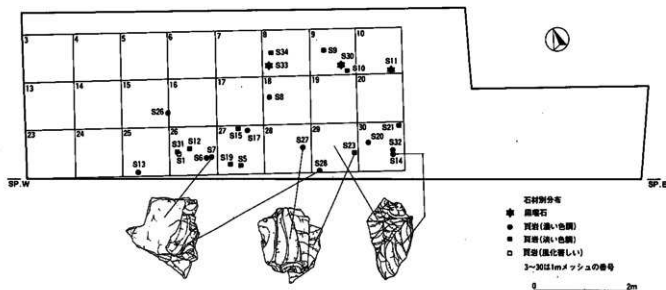


図9 第1号石器ブロック接合関係図および石材別分布図

2 区 全ての地点でⅢ層上部まで耕作が達していた。そのため、漸移層は残存していない。また、ローム層上部が攪乱されているため、原位置を示す遺物の出土状況は認められない。ローム層中には礫が散在しており、山側のb・d区では小規模な起伏の頂部でⅣ層まで攪乱が達していた。

礫層に含まれる岩石組成には1区と若干の違いが見られる。調査区東や東南に広がる中世代の礫が主で、三沢川や東側山地から供給されたものと考えられる(図6中の表)。

基盤礫層を形成する堆積物には、八ヶ岳泥流起因のものは少ないようである。

(3) 旧地形の復元

1区から2区にかけて作成した柱状図によれば、1区西側(a・b区)と2区東より(c・d区)に尾根頂部が存在していることがわかる。この尾根はいずれも南側山地から延びるものである。この点は現地形と類似している。基盤となる地形が成立したのはⅣ層の堆積によるところが大きかったと見られる。

ただし、Ⅲ層の堆積によって小規模な凹地が埋積するまでは、起伏の激しい微地形が認められる。石器ブロックの検出された1d区の№8地点付近のⅣ層上面の地形を見ると、前述の尾根(1a・b区に頂部を持つ)に対して直行する小支谷が東から西に向かって入りこんでいた状況がわかる(図7等高線図)。また、この地点は、小支谷と東側の谷に向かって、急傾斜していたことがわかる(写真図版1-1)。

寒冷期には山の崩落が頻繁に起きたと考えられる。Ⅳ(砂礫)層上面の起伏の激しさは、南側山地の小規模な崩落の蓄積、あるいは八ヶ岳側から帯状の堆積によって形成された可能性があろう。

第3節 検出された遺構

1 検出された遺構

Ⅲ層を切り込む黒色土の落ち込みは、攪乱か風倒木痕であり、縄文時代から中世にかけての遺構は検出されなかった。唯一の遺構は、Ⅲ層中で検出された第1号石器ブロックのみである。

2 第1号石器ブロック(SQ1) 図7~9・表1

位置 調査仮地区の1d区、世界測地に変換した日本測地で第Ⅷ系 $X = -7112$ 、 $Y = -1952$ 。東経 $138^{\circ}28'42''$ 。北緯 $35^{\circ}56'09''$ 。標高1344m付近に展開する。

立地 大局的には、矢出川第Ⅵ・Ⅶ遺跡を頂部とする尾根が東の谷に向かって傾斜する斜面中腹から上位に位置する。局地的な地形では、南側に小支谷が入り込んでおり、その傾斜面に遺物が分布している。

範囲 旧地形が高まりとなっていたブロック北側(1b区西より)は、道路敷の攪乱などがⅢ層下部までおよんでおり、遺物の広がりについては不明である。南側は、調査区ぎりぎりに遺物が集中していることから、調査区外に分布が広がるものと思われる。東側は遺物の途切れる付近から急激に落ち込んで低地に至る。谷への傾斜地(東側)では、同一の包含層(Ⅲ層)は厚く残存していたが遺物は検出できなかった。

平面規模 調査区南壁付近がブロックの中央付近と想定すると、直径6~7mが想定される。

層位 Ⅲ層上部が削平されており、Ⅲ層より上層に遺物が分布していたかは不明である。しかし、大半の遺物が、Ⅲ層下部の礫混じり層に近い位置で出土していることから、出土の主体はⅢ(いわゆるソフトローム)層中と見られる。遺物廃棄が寒冷期にあっていたため、自然礫とともに堆積土中を上下している可能性がある。最下層の遺物は、Ⅲ層下部の礫混じり(Ⅳ層の礫を巻き上げた部分)層中である(S13・26)。

一方、最も上位で出土した遺物はS1であり、他の石材の石核や剥片よりも上位に位置している。

垂直分布 傾斜地であることを多少考慮しなくてはならないが、遺物の垂直分布は、1.2m以内に収まる。

構成する石器などの特徴 器種別では、搔器1、石核8点(角錐状石器の可能性のあるもの1)、剥片30点(ナイフ形石器の可能性を持つ剥片1)である。遺物の分布する周辺のⅢ層は、全て5mmメッシュの篩にかけた(土嚢袋228袋分)が、細石刃や小型の剥片、屑片類の出土はほとんど認められなかった。

石材では、角錐状石器の可能性のある石核だけが異質であり、同一母岩と見られる剥片なども存在していない。それ以外は数点の母岩に集約されそうな石核や剥片で占められる(図9、表1)。このことから、角錐状石器?は単品で搬入された後、加工せずに廃棄されたのであろう。それ以外は、礫などの状態で持ち込まれた後、石器素材生産のための作業がなされたと見られる。しかし、明確な製品や砕片などが微量にとどまる点から、この場所で、最終工程の石器生産が集中的に行われたとは考えにくい。

第4節 出土した遺物

1 1区出土遺物(図11・12-1~17)

第1号石器ブロック出土遺物 個々の計測値や属性は表1に記した。

搔器と接合資料(1・2) 1は頁岩(註)の搔器である。縦長剥片の下端部に調整加工を施している。刃部中央の挟りは偶発的な可能性がある。接合関係にある2は、搔器素材獲得後、同一打面から1回、その後打点を移動させて作業を行っているが、良好な剥片が得られず廃棄したようである。

石核(2~9) 3は、最終剥離が基部を挟るように認められるため石核としたが、それ以前に側縁を鋸歯状にし、尖頭様に加工している点を意図的であると、角錐状石器の可能性を持つ。また、細石刃石核原形の可能性も残っている。細石刃石核と想定した場合、打面の縁辺部や背後部に細部調整がなされていない点、打面部に剥離が見られる点など、難点が多い。

3を除き、石核は大きく2者に分かれる。一つは、2・4-5・8-9で同一母岩の可能性のある。打面を転位させて石核の形を整えた後、平坦な打面から肉厚の縦長剥片(1や11・13)を剥離している。階段状の剥離(8-9)が見られ、良質な剥片を得られなくなった段階で廃棄されたものと考えられる。

もう一方は、6・7の小形な例である。6は自然面を多く残すが、7は打面を転位させながら寸詰まり剥片を剥離しており、形状はサイコロ状を呈する。前者に比べ緻密な石材を利用している。

剥片(8~15) 10は頁岩製の横長剥片である。切出形のナイフ形石器の可能性も若干残るため、他の剥片類と分離して掲載した。可能性としては、基部1箇所調整剥離と思われる剥離があること(偶発的な剥離の可能性もある)だけである。打点の調整や背部側縁の刃潰し加工もないため完成品とは考えがたい。

10以外は縦長剥片で占められ、大きく3分類できる。11・13は1・2などと同一母岩の可能性のある。2で見られたように、石器素材を得るために剥離された厚手の剥片である。12・15は前者よりは密着な石材部分を活かし、鋭利な縁辺を持つように剥離されたものである。12上端には調整加工の可能性を持つ剥離がある。14・16・17は、断面三角形や台形を呈し、側縁が並行となる石刃である。いずれも調整加工の施されないまま廃棄されている。

その他の出土遺物 矢出川第Ⅵ遺跡の南端部と目される1a区、および分布図の範囲外である1d拡張区のⅠ層から黒曜石剥片が各1点(写真図版5)出土した。

註 中Ⅰ層遺跡などの報告で緑色チャートに分類されている石材と同一である。ここでは頁岩とした。

2 2区出土遺物

I層（耕作土）中から黒曜石砕片1点（写真図版5）が出土した。I層中のため不確実であるが、矢出川第65地点の南端部に属する可能性がある。この他、III層中からチャート製の角礫が集中して出土したが、剥片や屑片がまったくなく、人為的な打割や加工の見られる例もなかった。他の角礫とともに南側山地から北へ向かって帯状に広がる出土状況を示しており、自然礫と判断した。

3 隣接地点採取遺物

1区に隣接する矢出川第VI遺跡から、黒曜石製の剥片が表面採取できた。調査地区からは北（写真の右側）へ数十m以上離れた地点であり、遺跡の中心がそちら側に存在していた可能性を示している。

2区に隣接する矢出川第65地点からは、黒曜石製の細石刃石核作業面付き剥片（図10-1）や多数の剥片が採取できた。いずれも調査地区から北（写真の右奥）へ数十m以上離れた、矢出川湿地に近い地点である。調査区に接する畑での採取はできなかった。

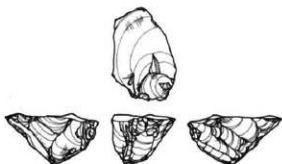


図10 第65地点採取遺物



1区と矢出川第VI遺跡



2区と矢出川第65地点

第4節 出土遺物

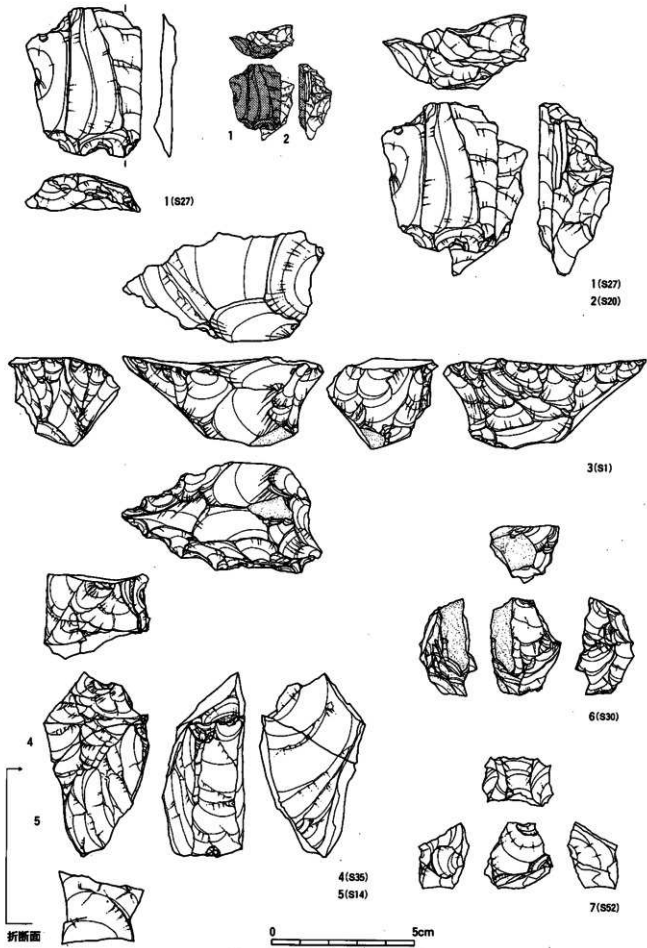


図11 第1号石器ブロック出土遺物(1)

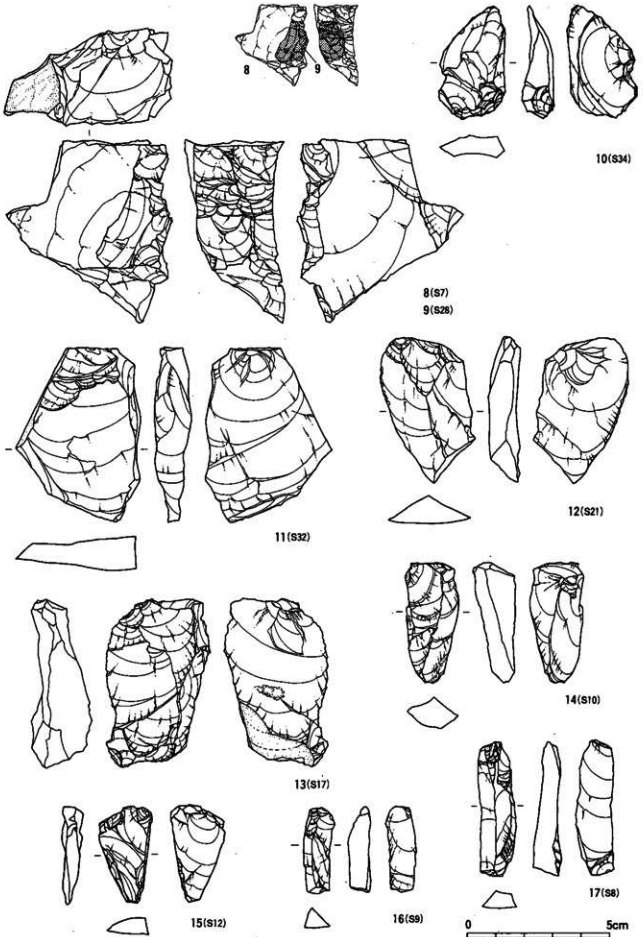


図12 第1号石器ブロック出土遺物(2)

第4節 出土遺物

表1 出土遺物一覽

※2以下で記載したものは、ハヤシ原石器グループの場合で褐色チャートと記載されたものは同じものである(産地不明)。

調査 番号	調査 時期	調査 地点	出土 位置	層位	遺物 番号	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	特徴	備考		
11	3	1	d	26	Ⅲ上	SG1-81	石核(内面縁部 の可能性がある)	71.5	38.0	33.5	72.21	頁岩	遠端縁が基部に入っており石核とした。内面縁部の平直部で、断面は内面の三角形である。片端部は遠端縁状に加工されており片端部の可能性がある。縦方向に石核とするには、行直縁部や縁部部の加工加工が不可欠である。ただし、縦方向に石核とする可能性は低い。	同一層位と見られる片片・砕片なし。	
11	3	1	d	26	Ⅲ上	SG1-82	石核	28.0	17.5	10.0	3.87	黒曜石	縦長、内面、片端縁は平行し、断面三角形を呈する。下縁は後述のガリシ		
11	3	1	d	27	Ⅲ上	SG1-84	砕片								
11	3	1	d	27	Ⅲ上	SG1-85	砕片	5.5	35.0	8.5	1.13	頁岩	縦長、不定形。背面側に縁部のホグタイプ側縁部がある。石核の打面再生のための割られたものか。		
11	3	1	d	27	Ⅲ上	SG1-86	砕片	21.0	8.0	4.0	0.42	頁岩	縦長、扁平。打面以外は無縁部		
12	8	1	d	26	Ⅲ	SG1-87	石核	63.5	60.0	33.5	101.06	頁岩	角縁状の片片を石核として使用。一部に自然面露出。その面が打面であった可能性がある。切取れた早期面の痕跡を打面として、作業面には縁部状の痕跡がある。片端部が折られてしまった。	製片528と結合	
12	17	1	d	16	Ⅲ	SG1-88	製片	47.0	12.5	7.5	5.14	頁岩	縦長、断面三角形で内面、縁部はほぼ平行だが、縁部が加工された。縁部打面5角形からの製片		
12	18	1	d	9	Ⅲ	SG1-89	製片	29.0	8.5	8.5	2.11	頁岩	縦長、断面三角形で内面、縁部はほぼ平行。打面側に断面状の小側縁あり。下縁は折れか?		
12	14	1	d	9	Ⅲ	SG1-91G	製片	42.5	20.0	12.5	8.54	頁岩	縦長、扁平。打面が厚みを取るためか、左側面に側縁が入っている。打面の一部に自然面がある		
12	15	1	d	26	Ⅲ	SG1-91Z	製片	11.0	8.5	1.5	0.14	黒曜石	縦長、扁平。縦長中のみ出土であり、縁部の折れは後述のものと考えられる		
12	15	1	d	26	Ⅲ	SG1-91Z	製片	33.5	19.0	8.0	3.88	頁岩	縦長、打面縁は内面方向。下縁部は傾斜になる。両側打面5角形からの製片		
12	15	1	d	25	Ⅲ下	SG1-91Z	製片	30.0	18.0	8.8	4.88	頁岩	縦長、内面、断面三角形を呈する。打面と断面を作出されており片端が固定されている		
11	5	1	d	30	Ⅲ上	SG1-91A	石核	38.0	34.5	28.0	45.74	頁岩	内面の片片を利用し、935切取後、その切取面の痕跡を打面として、製片製縁を試みている	S25と結合	
12	13	1	d	27	Ⅲ下	SG1-91T	製片	41.0	38.0	16.0	22.73	頁岩	不定形、内面の分厚部? 下2段は自然面か?		
12	13	1	d	27	Ⅲ下	SG1-91T	製片	59.0	26.0	20.0	36.08	頁岩	縦長、内面、下縁部の一部に自然面が露出		
11	2	1	d	30	Ⅲ上	SG1-91B	石核	37.0	45.0	26.5	20.00	頁岩	不定形、内面の分厚部、1面は自然面か? 製片製縁はほとんど行われていない		
11	2	1	d	30	Ⅲ上	SG1-92D	石核	53.0	38.5	18.0	28.82	頁岩	内面の片片を利用した痕跡で、縁部打面の打点を移動させたと思われる痕跡を有している	S27と結合	
12	12	1	d	30	Ⅲ上	SG1-92I	製片	47.5	28.0	10.5	14.54	頁岩	縦長製片、断面三角形で、断面縁が内面になる。左側縁の縁部は縁部は後述のガリシか?		
11	1	1	d	26	Ⅲ	SG1-92E	製片	16.5	14.5	10.0	2.26	頁岩	不定形、内面	S46と結合	
11	1	1	d	15	Ⅲ	SG1-92E	製片	50.0	32.5	17.5	24.85	頁岩	縦長、内面で不定形。打面の片端縁部		
11	1	1	d	26	Ⅲ下	SG1-92T	縁部	50.5	40.0	11.5	27.84	頁岩	縁部製片の下縁に断面縁部を露出し打点を作出。中央の縁部は縁部か後述に付いた可能性がある	S28と結合	
12	8	1	d	28	Ⅲ下	SG1-92B	製片	32.5	26.5	12.5	9.88	頁岩	石核37から取れた縁部製片、内面で自然面の露出が認められる	S7と結合	
11	8	1	d	8	Ⅲ下	SG1-93D	石核	34.0	25.0	20.5	13.55	黒曜石	HK製	小振りな石角縁を使い、片端を少しながら製片製縁を露出していると思われる。4面に自然面露出	
12	11	1	d	30	Ⅲ上	SG1-93Z	製片	33.0	14.0	6.5	2.81	頁岩	縦長、扁平、1面以外は無縁部		
12	11	1	d	30	Ⅲ上	SG1-93Z	製片	60.0	44.0	13.0	35.00	頁岩	縦長、分厚い。片端部に自然面がある。S17と同層位の同一打面からとられた可能性がある		
12	11	1	d	8	Ⅲ下	SG1-93Z	製片	15.5	13.0	4.0	0.57	黒曜石	HK製	扁平、不定形。縁部縁部はガリシ風か?	
12	10	1	d	8	Ⅲ下	SG1-93A	製片(チャート)	40.5	24.5	11.0	8.61	頁岩	縦長製片。左側縁の縁部部分を刃部と想定すると切取面となる。両側の断面に1ヶ所だけ製縁部を有する可能性を持つ。縁部縁部はガリシ風か?	右側縁は縁部を露かして刃部と想定。両側縁部が縁部でないとするチャート製片になるか?	
11	4	1	d	29	Ⅲ上	SG1-93B	石核	40.0	30.0	24.0	20.90	頁岩	S14と切取分厚部、1面製片製縁を試みただけで裏面加工されていない	S14と結合	
11	4	1	d	18	Ⅲ	SG1-93B	製片	18.5	13.0	4.0	0.85	頁岩	縦長、扁平	縁部縁部	
11	4	1	d	15	Ⅲ下	SG1-93T	製片	20.0	13.5	5.0	1.10	頁岩	縦長、扁平	縁部縁部	
11	4	1	d	20	Ⅲ	SG1-93B	製片	16.0	9.5	2.0	0.26	頁岩	縁部? 断面、全面無縁部	縁部縁部	
11	4	1	d	19	Ⅲ	SG1-93B	製片	13.0	7.0	1.5	0.11	頁岩	縁部、扁平、全面無縁部	縁部縁部	
11	4	1	d	27	Ⅲ上	SG1-94D	砕片	10.5	7.5	1.5	0.12	頁岩	縁部、扁平	縁部縁部	
11	4	1	d	27	Ⅲ上	SG1-94I	製片	19.5	10.0	6.5	1.16	頁岩	縁長、断面五角形、打面ののみ自然面	縁部縁部	
11	4	1	d	18	Ⅲ下	SG1-94Z	製片	24.5	14.0	5.0	1.84	頁岩	縁長、扁平。片端縁は自然面か。背面に縁部縁部あり	縁部縁部	
11	4	1	d	17	Ⅲ	SG1-94Z	製片	12.5	13.0	3.5	0.64	頁岩	縁長、扁平。上下ともに折れ(両側面?)	縁部縁部	
11	4	1	d	19	Ⅲ	SG1-94Z	製片	21.5	12.0	3.5	0.81	頁岩	縁長、扁平、不定形。打面ののみ自然面	縁部縁部	
11	4	1	d	8	Ⅲ下	SG1-94Z	製片	14.5	8.0	3.5	0.24	頁岩	縁長、断面がZ字形に付いた縁部の形状。断面縁部で下縁は平行になる	縁部縁部	
11	4	1	d	19	Ⅲ上	SG1-94B	製片	26.0	15.0	11.0	3.70	頁岩	不定形、内面	縁部縁部、S23と結合	
11	4	1	d	20	Ⅲ	SG1-94T	砕片	8.5	4.0	2.0	0.04	頁岩	縁部縁部	縁部縁部	
11	4	1	d	8	Ⅲ下	SG1-94Z	砕片	19.5	7.0	4.5	0.56	頁岩	不定形、内面、打面と縁部1面に自然面露出	縁部縁部	
11	4	1	d	26	Ⅲ	SG1-95G	製片	10.0	5.5	1.5	0.13	黒曜石	縁部縁部	縁部縁部	
11	4	1	a	Ⅲ上	Ⅲ上	SG1-95I	縁部縁部のある製片	20.5	16.5	7.0	2.22	黒曜石	3個面に縁部縁部縁部が認められるが、割中から出土したため、後述に付いた可能性がある		
11	7	1	d	4	Ⅲ下	SG1-95Z	石核	21.5	24.0	22.0	9.95	頁岩	打面を縁部に加工して加工。チャート状となつた縁部。長さ1cm程度の薄い製片を有していると見られる	縁部縁部	
11	7	1	d	6	Ⅲ下	SG1-95Z	製片	22.5	21.0	10.0	4.51	頁岩	不定形、内面、1側縁は自然面か?	S52同一層位か?	
11	7	1	d	17	Ⅲ	SG1-95A	製片	20.0	14.0	4.5	1.00	頁岩	不定形、扁平、自然面なし	縁部縁部、S52同一層位か?	
11	7	2	c	13	Ⅲ	SG1-95B	製片	18.0	7.0	1.5	0.17	黒曜石	縁長、扁平、縁部縁部平行する部分あり。上下縁折れは後述の可能性がある		
10	1	65	-	1	産地	95A	縦石刃石核片 両面製片	24.0	22.0	26.0	9.73	黒曜石	HK製	下縁部に自然面を露す縁部縁部の縦石刃石核片。打面が割取られていない。打面を再生させたものかあるいは両側縁部は有縁部とない	

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析のねらい

ここでは、以下の2項目の課題を設定した

- ① 石器の出土した層位、およびその上下層の火山灰供給源と年代について
- ② 黒曜石の産地同定について

①については、石器の時期を間接的に知るため、鍵となる火山灰が検出できるのか、残存状況が悪い場合は包含されるピークがどこにあるのかを明らかにし、石器出土層との上下関係を解明したい。また、V層以下の堆積層の成因（降下火山灰層があるのか、あるいは二次堆積なのか等々）の解明も目的とする。

②については、黒曜石の入手先を知るためである。これまでの分析では、野辺山I期では遠隔地の黒曜石は少なく、神津高などの黒曜石が多くなるのは細石器の時期（野辺山IV期）とされている。

この他、基盤層を形成している礫層が野辺山原を形づくっているハケ岳泥流に起因するものか、あるいは南の飯盛山側からの崩落や土石流によるものかを確かめるため、IV層中に包含される礫の石材を調べた（図5・6）。石材を鑑定した地点については、おおむね南側山地側に供給源を持つ礫であった。しかし、礫の顔つきは微地形ごとに異なっているため、すべてがそうであるかは判然としない。また、黒曜石以外の石器石材についても肉眼による判別をした。頁岩が主であり、遠隔地の石材はないようである。

第2節 火山灰分析結果

1 火山灰分析について

火山灰分析は、バリノサーヴェイ株式会社（本件の管理者：千葉博俊、担当者：矢作健二、分析者：石岡智武）に委託した。ここでは紙数の関係上、報告書から主要な部分について抜粋する。詳細報告については長野県埋蔵文化財センターで保管しており、閲覧が可能である。

実施した分析項目は、①火山ガラス比分析によるテフラの検出。②テフラ同定精度向上のための火山ガラス屈折率測定。③ルーム層対比のための重鉱物組成分析。以上3項目である。試料は、第1号石器ブロック検出地点の深掘り断面から調査担当者があらかじめ採取したNo1～11（図8・14）である。このうち、No6と7は木の根による攪乱箇所を避けるため、同一深掘りトレンチの西壁から採取した。

2 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥後に篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」

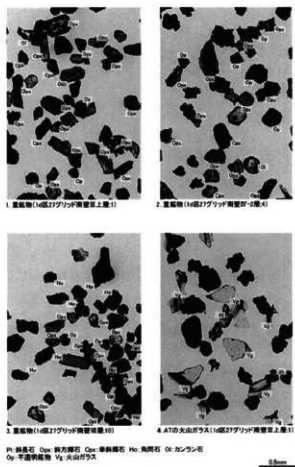


図13 重鉱物・火山ガラス顕微鏡写真

3 結果および考察

結果は表2、図14・15に示す。

火山ガラスは、Ⅲ層で少量の無色透明のバブル型火山ガラス等が見られる(図14・表2)。バブル型が主体を占める点や、特異的な屈折率(図15)から、始良Tn火山灰(AT)に由

表2 重鉱物・火山ガラス比分析結果

層名	試料番号	斜方輝石	角閃石	輝石	角閃石	不明重鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
Ⅲ上	1	0	137	25	3	0	58	27	250	49	0	4	197
Ⅲ下	2	4	138	12	3	0	51	42	250	38	0	12	200
Ⅳ-1	3	16	105	27	13	1	74	14	250	1	1	4	244
Ⅳ-2	4	27	78	27	5	0	79	34	250	0	0	2	248
V	6	7	142	16	12	0	48	25	250	0	0	0	250
Ⅵ	8	8	130	26	26	0	47	13	250	0	0	0	250
Ⅶ	10	8	74	14	80	2	47	25	250	0	2	0	248
Ⅷ	11	12	66	37	85	4	23	23	250	0	2	1	247

とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、軽鉱物においても変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

なお、分析は発掘調査時の所見による分層を参考とし、各層1点の計6点の試料を選択したが、後述するように屈折率測定の対象となる火山ガラスが検出されたのは2点の試料からのみであったことから、重鉱物・火山ガラス比分析には計8点の試料を選択している。

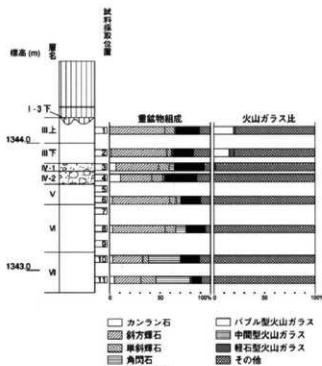


図14 1d区27グリッド南壁深掘地点の重鉱物組成および火山ガラス比

来すると考えられる。今回、ATの最濃集部は把握できなかったが、IV層では極微量であることから、III層はAT降灰以降の層位と考えられる。

また、中つ原遺跡で細石器の出土層位から検出されたUG(立川ローム上部ガラス質火山灰)の産状は不明である。IV層以下では、火山ガラスが極微量かあるいは認められなかった。

重鉱物組成では、斜方輝石が多いことを示し

ている。III層およびIV層の砂礫については、背後の新第三紀火山岩に由来する可能性が高いことを示している。この組成は近隣の三沢遺跡と類似性を示している。

また、V層以下の層の形成もIII層同様、砕屑物や風塵などの二次堆積物の可能性が高い。

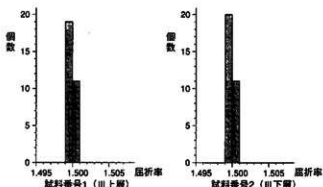


図15 火山ガラスの屈折率

第3節 黒曜石の産地同定結果

黒曜石の産地同定は、沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に依頼した。その方法は、エネルギー分散蛍光X線分析法(EDX)である。紙数の関係上、ここでは同定結果のみを掲載する。詳細な報告は、長野県埋蔵文化財センターで閲覧が可能である。また、分析方法などに関しては、当センターに問い合わせる

か、望月明彦教授のホームページ「Obsidian Lab. 黒曜石研究室」[<http://www.busitu.numazu-ct.ac.jp/mochizuki/home.htm>]を参照していただきたい。

今回、総合的な評価を下すには、黒曜石そのものの出土が少なく、採取地点も離れている。ただし、野辺山地区において、細石器の時期に見られる神津島産の黒曜石は含まれていなかった。特に、細石器の時期よりも古くなる可能性が高い第1号石器ブロックからは、不明NK群を含めても、遠隔地の石材がなかったことになる。近隣の出産地では、矢出川遺跡群から最も距離の近い夢科冷山群(表草峠など)の石材が多かった。

表3 判別四法・判別分析からの最終推定結果

研究室 年間通番	分析番号	出土地点		層位	遺物番号	推定産地
		仮地区	既存の遺跡名			
MK 05-5504	05 YDG-1	1 d 益張	矢出川第VI・VII遺跡隣接	I 3	S 3	夢科冷山群
MK 05-5505	05 YDG-2	1 a	矢出川第VI遺跡	攪乱	S 51	諏訪曇ヶ台群
MK 05-5506	05 YDG-3	1 d	矢出川第59地点隣接 第1号石器ブロック	Ⅲ上	S 30	不明NK群
MK 05-5507	05 YDG-4	1 d	同上	攪乱	S 11	夢科冷山群
MK 05-5508	05 YDG-5	1 d	同上	Ⅲ下	S 33	夢科冷山群
MK 05-5509	05 YDG-6	1 d	同上	Ⅲ	S 50	夢科冷山群
MK 05-5510	05 YDG-7	地区外	矢出川第65地点	表採	S 56	夢科冷山群
MK 05-5511	05 YDG-8	2 c	矢出川第65地点隣接	I 3	S 55	和田土屋横西群

表4 判別四法による推定結果と判別分析による推定結果

遺物番号	判別四法	判別分析					
		第1候補産地			第2候補産地		
		判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
S 3	TSTY	TSTY	3.39	1	TSHG	20.41	0
S 51	WHD	SWHD	12	1	SBIY	123.5	0
S 30	NK	NK	3.25	1	GERO	29.36	0
S 11	TSTY	TSTY	8.76	0.9992	TSHG	19.13	0.0008
S 33	TSTY	TSTY	9.81	1	TUTI	40.97	0
S 50	TSTY	TSTY	4.1	0.9999	TSHG	18.37	0.0001
S 56	TSTY	TSTY	5.42	0.9999	TSHG	20.3	0.0001
S 55	DTN	WDTN	11.95	1	WDTK	32.37	0

第5章 成果と課題

第1節 調査成果について

1 主な調査成果

今回の調査で得られた主な成果は、大きく以下の4点である。

- ① Ⅲ層中～下部で、新発見遺跡として石器ブロックが検出されたこと
- ② Ⅲ層上部までは攪乱が激しく、細石器以降の遺物はこの攪乱中からしか採取できなかったこと
- ③ ①・②から、既出の細石器資料と第1号石器ブロックが層位を異にしていたと見られること
- ④ 矢出川遺跡群における旧石器時代の微地形と遺跡のあり方について、尾根の基部付近に遺跡が少ない点（攪乱による消滅もあるか）と、野辺山Ⅰ期とされる時期の立地に資料を追加できたこと

以下、①・②について成果をまとめ、③・④についてはその中で触れてゆくこととする。

2 Ⅲ層中検出の石器ブロックについて

層位と時期について 今回の調査では、石器ブロックがⅢ層中～下部で検出できた。明確な石器が存在しないため断定はできないが、関東地域のⅣ層下～Ⅴ層に対応する可能性がある。野辺山原では、野辺山B5地点出土石器群（佐藤1970）と同時期、すなわち野辺山Ⅰ期（柴1993）に比定されよう。関東地域との対比では、武蔵野台地ではⅡa期（小田・キーリー1975）、相模野台地では相模野第Ⅲ期（矢島・鈴木1976）あるいは相模野段階Ⅴ（諏訪問1988）と並行するとされている（柴1993）。

この場合、矢出川第Ⅰ遺跡での層位所見（米村ほか1982）とも一致してくる。今回の調査では、細石器の時期の遺物が層位的に検出されなかったため断定はできない。しかし、既存のデータが示すように細石器が最も多く出土する層がⅡ層～Ⅲ層上部とすると、今回の石器ブロックはそれよりも下位から出土しており、時期的に遡る可能性がある。火山灰の分析によれば、年代の指標となるAT（約2.6～2.9万年前）が石器を含むⅢ層中から見つかった。一方、細石器の時期に相当する年代に近いUG（約1.3万年前）は検出されなかった。これはⅢ層上部が削平されていたためと考えられる。よって、第1号石器ブロックは、AT降灰後からUG降灰以前の可能性が高い。

石器組成について 石器ブロックの南側半分以上が調査区外であるため全貌は不明である。積極的に石器と認定した場合は、角錐状石器1点（石核）、切出形ナイフ形石器1点（横長剥片）、掻器1点となる。この他、石核7点、剥片29点で構成されている。

角錐状石器の可能性を持つ石核は、同一石材の剥片・砕片がブロック内にまったくない。また、石材も他の石核・剥片とは異質であるため、この場で作業が行われないうまま廃棄された可能性が高い。

他の石材には石核・剥片・砕片が存在しており、この場で作業が行われている。ただし、明確な製品がないことや微細な砕片がほとんど採取できなかったことから、この場所では剥片を得る段階までの作業が中心で、石器製作に適した剥片などの素材は、次のキャンプ地へ持ち出されたものと考えられる。

表5 遺物出土地点と既存の遺跡

出土地点	
仮地区	既存の遺跡名
1 d 披瀝	矢出川第Ⅴ・Ⅵ遺跡間線
1 a	矢出川第Ⅴ遺跡
1 d・石器ブロック	矢出川第59地点間線 (新発見の地点)
2 c	矢出川第65地点間線

石核・剥片の特徴および想定される作業工程 少ない資料から作業工程を推定すると、第1工程として、礫から石核を作出するための剥離が認められる。この場合、あらゆる方向から剥離が施されており、石核を角礫状に整えている。ただし、細石刃石核のような細かな調整は行われていない。

第2工程では、小口と呼べるような平坦な打面(2、8-9)から、分厚い縦長剥片(11、13)が剥離される。長さはほぼ5~6cmに揃えられている。階段状の剥離しか得られず廃棄された例(8-9)や、1・2度の剥片剥離作業のみで廃棄された例(4-5)が残されている。同一石核の短辺側では、17など、足の長い石刃が剥離された可能性がある。

一方、ひじょうに小形の石材を活用し、あらゆる方向から打割して、寸詰まりの薄い剥片を剥離した石核がある(6・7)。打面が転位を繰り返して、サイコロ状を呈している。残念ながら接合する剥片や石器は得られなかった。

第2工程で得られた肉厚の剥片は再び石核として使用されている(2)。また、一部は刃部加工がほとんどされて搔器(1)となっている。剥片剥離の主体は縦長剥片や石刃を得る技法であるが、10のような横長剥片が存在している。ただし、明確な横長剥片はこの1点のみである。

石材の傾向 頁岩がほとんどを占め、黒曜石が少量加わる。頁岩は近隣の山梨県側で採取が可能とされ、比較的近隣の石材を使用している。黒曜石については、蓼科冷山群が多く、遠隔地の石材を利用していない。この点では、神津島産の黒曜石が数多く入る細石器の時期(堤2004)と異なっており、古い様相と言えなくもない。ただし、資料数が少なすぎる難点がある。

頁岩は、一個体中에서도色調や質に変化が見られる(2)ため、持ち込まれた母岩はひじょうに少量であった可能性が高い。

立地について 野辺山原におけるナイフ形石器(野辺山I期)の遺跡立地については、微視的には「背後に傾斜面をまじかにせおうような、傾斜変換線のより下位に位置している」(安森1982)とされ、傾斜変換線の上位の背後にひらけた空間を持つ細石器の時代と異なるという。今回の石器ブロックの検出地区を見ると、東西方向で見れば、傾斜面上の開けた土地には矢出川第VI遺跡があり、それよりも下位の東側の谷に向かう傾斜変換線下位に立地している。こうした点は、安森氏が指摘した傾向と整合性を示している。

第1号石器ブロックの位置づけ 以上、第1号石器ブロックの時期については、明確な石器がほとんどなく断定するには至らない。しかし、層位が細石器の既出資料に比べて深い点。関東地域のIV層下部・V層に類似する特徴がわずかながらある点。遠隔地の石材が存在していない点。立地は野辺山I期の既出資料に類似している点などから、野辺山I期まで遡る可能性がある。今後の議論の期待をしたい。

3 細石器・遺物包含層まで達する攪乱

攪乱の深度 矢出川遺跡群の研究史を紐解くなかから、細石器の時代の資料が期待された。しかし、細石器などを包含していたであろう漸移層(II層)・ソフトローム層(III層)上部が無傷で残存している地点はほとんどなかった。これまでもに危惧されてきたことではあるが、深耕や客土、道路工事、水道管の埋設などの攪乱によって、原位置を保つ遺物を発見することはできなかった。そのため、本来あるべき遺跡がなくなってしまったのか、あるいは最初から遺跡の外縁部であったのか、判断を下すことは難しい。

各個別遺跡の外縁部か？ ただし、今回の調査区に接する遺跡(矢出川第VI遺跡、第65地点ほか)で表採を実施したところ、比較的採取しやすかったのは緩傾斜の台地上か矢出川湿地に近い地点であった。こども客土や耕作による遺物の移動がないとは言えきれないが、現段階では、遺跡の中心は矢出川湿地やそこに流入する沢に近い地点と想定される。いずれも、今回の調査区からは数十m以上離れた地点である。一方、今回の調査区は矢出川湿地から離れ、南側山地から緩傾斜(矢出川扇状地)に地形が変換する部分にあつ

ている。そのため、立地条件を考慮すると、遺跡の外縁部であっても不思議はない。もしこうした解釈が正しいとすれば、個別遺跡の範囲や構造を知る上で、貴重な成果を得たと言えよう。

第2節 今後の課題

Ⅲ層中～下部出土資料について 第一には、多くの研究者のご意見をうかがって第1号石器ブロックの時期を確定しなくてはならないであろう。その上で、野辺山Ⅰ期に相当するならば、明報と言えるであろう。このⅢ層中～下部については、開拓に伴う攪乱がほとんどおよんでいないからである。逆説的に見れば、攪乱されていなかったため、地表面に遺物が浮き上がる例が少なく、実態が不明な時期にあたる。矢出川遺跡群における細石器を遡る時期の研究が課題の一つとなる。

AT降下以前の痕跡について 1d区では、Ⅳ層とした砂礫層の下層にローム層が堆積していた。今回の分析では、その堆積年代を解明するには至らなかったが、少なくとも後期旧石器時代の層が残存していたとすれば、AT降下以前の人類の痕跡が残されている可能性がでてくる。これまで、まったく不明であったこの時代の研究も課題の一つとなってこよう。

遺跡群全体の保護について 近現代における野辺山開拓以降の攪乱については、矢出川遺跡群をはじめ野辺山高原全体の遺跡群に対して懸念されてきた点である。今回の調査区でも、本来存在した遺跡が攪乱によって見つからなかったのか、あるいは遺跡の範囲外であったのかを断定することができなかった。今後は、遺跡の有無や攪乱の状況を確認するためにも、試掘調査などによって遺跡範囲や層序の確認を行い、遺跡群全体の保護をどうすべきか、将来を見据えた方針を立てる必要があろう。

註 個々の石器については、主に大竹憲昭・堤隆両氏からご教示をいただいた。両氏の説明によれば、位置づけについてもっと慎重であるべきかも知れない。また、野辺山地区の石器採相や石材の供給などについては堤氏からご教示をいただいた。

引用・参考文献

- 安藤政雄 1982 「細石器文化における矢出川遺跡群の性格」『報告・野辺山シンポジウム1981』明治大学考古学研究会
- 小田静夫・C. T. キーリー 1975 『日本先土器時代の編年』国際基督教大学考古学研究中心
- 金井典美・石井剛孝 1965 「先土器時代における高冷地遺跡の自然環境（予報）」『信濃』17巻8号信濃史学会
- 佐藤達夫 1970 「長野県南佐久野辺山B5地点の石器—ナイフ形石器の編年に関する覚書—」『信濃』22巻4号信濃史学会
- 石器文化研究会 1996 「シンポジウムAT降下以降のナイフ形石器文化—関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討」『石器文化研究』5号 石器文化研究会
- 石器文化研究会 1998 「記録・論評・回答集 シンポジウムAT降下以降のナイフ形石器文化—関東地方におけるV～IV下層段階石器群の検討—」『石器文化研究』6号 石器文化研究会
- 諏訪問順 1988 「相模野台地における石器群の定置について—層位の出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川考古』24 神奈川考古談話会
- 堤 隆 1993 「遠き狩人たちの八ヶ岳」ほおずき書籍
- 堤 隆 2004 「矢出川遺跡における“神津思慮島群”の相石刃石核類」『黒曜石文化研究』第3号
- 長崎 治 1998 「野辺山地域のナイフ形石器群における矢頭器組成の意味—三沢遺跡と柏垂遺跡の比較を通して—」『長野県考古学会誌』86 長野県考古学会
- 野口 洋 1995 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群—石器製作の工程配置と連綿の体系—」『旧石器考古学』51 旧石器文化談話会
- 矢島国雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古談話会
- 吉沢 靖 1991 「野辺山原のナイフ形石器文化」『丸山遺跡』南牧村教育委員会ほか
- 米村衛ほか 1982 「矢出川第Ⅰ遺跡の発掘調査」『報告・矢出川シンポジウム1981』明治大学考古学研究会

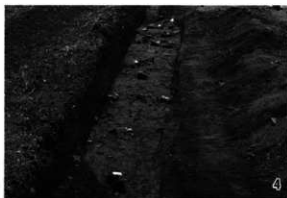
1. 矢出川遺跡群
の位置
(1952年末軍撮
影に加筆)



2. 1a区
完掘状況



3. 1a区
No 4 柱状図
作成断面



4. 1a区
III層下部自然礫
出土状況

5. 1b区
作業風景





6



7

6. 1d 拡張区
剥片出土状況

7. 1d 区
第1号石器ブ
ロック
(西から)



8



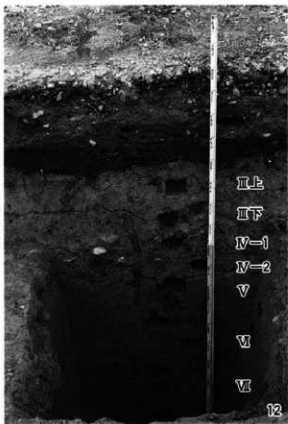
9

8. 同上
(東から)

9. 同上
石核出土状況



10



II上

II下

III-1

III-2

IV

V

VI

VII

12

10. 同上
石核・剥片出土
状況

11. 同上
石器出土層位

12. 1d 区
27 グリッド柱
状図作成断面



11

13. 1d区
第1号石器ブ
ロック完掘およ
び層序



14. 1d区谷部
完掘状況



15. 2a区
№31柱状図作成
断面



16. 2a区
Ⅲ層上部完掘状
況(風倒木痕入
り)



17. 2c区
Ⅲ層下部自然礫
流れこみ状況

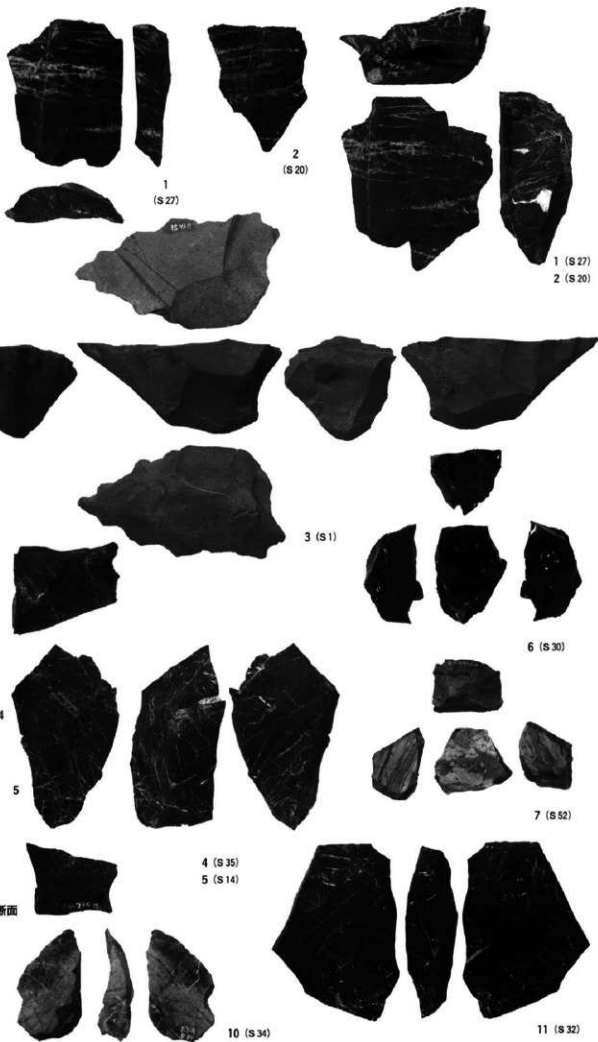


18. 2c区
№35柱状図作成
断面



第1号石器ブロック(1)

- 1 接合器
- 2 接合石核
- 3 石核 (角錐状石器?)
- 4-7 石核
- 10 剥片 (ナイフ形石器?)
- 11 剥片



折断面

10 (S 34)

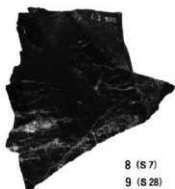
11 (S 32)

第1号石器ブロック(2)

8・9 石核・剥片

12~17 剥片

S11・S33 砕片



8 (S7)

9 (S28)



12 (S21)



13 (S17)



14 (S10)



15 (S12)



16 (S9)

その他の地区

S51 1a区

(矢出川第VI遺跡)

S3 1d 鉤張区

S55 2c区

(矢出川第65地点)

S56 細石刃石核作業

面付剥片

(矢出川遺跡第65地点

表探)



17 (S4)



S11



S33



S51



S3



S55



S56

報告書抄録

ふりがな	けんえいはたけちたいそうごうせいびじぎょうのべやまちくまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書名	県営畑地帯総合整備事業野辺山地区 埋蔵文化財発掘調査報告書2—南牧村内その2—							
副書名	矢出川遺跡群							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	77							
編者名	寺内隆夫							
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL026-293-5926							
発行年月日	2005年（平成17年）9月9日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やでがわいせき ぐん 矢出川遺跡群	南佐久郡 南牧村 大字 野辺山 二ツ山	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
		20305	県遺跡番号 352	第1石器ブ ロック地点 35°56'09"	第1石器ブ ロック地点 138°28'42"	2005年4月11 日～6月3日	3,000㎡	農道拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
矢出川遺跡群	石器 ブロック	旧石器時代	石器ブロック	角錐状石器？、 搔器、石核、 剥片ほか	Ⅲ（ローム）層中で野辺山Ⅰ期に遡る可能性 のある石器ブロックを検出			

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 77

県営畑地帯総合整備事業野辺山地区埋蔵文化財発掘調査報告書 2
—長野県南牧村内 その2—

矢出川遺跡群

発行 平成17(2005)年9月9日

発行者 長野県佐久地方事務所

長野県南牧村

(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4

TEL 026-293-5926

FAX 026-293-8157

Eメール maibun@grn.janis.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社

長野市西和田470番地

